

満州

国境の街からの邦人引揚記

埼玉県 安達 為也

終戦時、私はハイラル市に所在する興安北省公署に勤務していた。興安北省は、満州の西北の国境にあつて、シベリア、外蒙などソ連に接していた。三市、六旗（県）の行政組織があり、蒙古人を中心に中国人、ロシア人、日本人など多くの民族が雑居していた。国境に接する省だけあつて、師団司令部など多くの軍隊が駐屯していた。

住民は平和な日を送っていたが、八月九日未明、突如としてソ連軍の爆撃があり、ついで戦車部隊が一斉

に突入し、省全体は恐怖の坩堝と化した。

味方として期待していたオロチョン族（興安嶺北側に住む山岳民族）の反乱によって多くの人が殺りくされ、また、避難の途中、疲労と飢餓のため死亡したものが多く、日本に辿りついたものは僅か数人に過ぎなかつた。国境に最も近い旗公署の所在地では、ソ連戦車部隊の突然の侵入により、なすすべもなく、「われらソ連軍に突入する」との無電を省公署に打電したまま行方がわからなくなった。あとでわかつたことであるが、男子はすべてソ連に拉致され、女子はソ連軍に暴行、恥辱の限りをつくされたようである。また、ある旗ではソ連軍を目前にして絶望し、二十四人の夫人たちが、三十二人の愛児を道連れに手榴弾をもって集団自殺するという凄惨な事件もあつた。そのほか、

興安嶺の密林の中で、泣き叫ぶ子供たちの声で土着民に発見される危険と飢餓のためこれ以上子供たちの避難は不可能と思い、二十四人の児童の生命を絶たざるを得ない悲惨な事件、また、避難の途中、陣痛がおこり出産したが、母親はこれ以上歩けないので子供と共に殺してくれと懇願する悲痛なことも起こった。

私達の住んでいたハイラル市も、八月九日未明（五時頃）、突如としてソ連軍の爆撃により目を覚まし、直ちに省公署に非常呼集され、対策を協議した。いずれにしろ司令部の意向を確かめる必要があるということ、私が司令部との連絡に当たることになり、直ちに司令部に行った。

市民のことに何も指示がないので私から要求し、やっと市民は馬車を用意するからそこに集合すべしとの命令があり、私は命令を受領し省公署に戻ったが、省公署は既にカラであった。現地の守備部隊から、ソ連軍は夕方までハイラル市内に突入する情報であったので、公署の人や男子は要塞に入れとの命令に男子は要塞に入った後であった。女子は市内にまだ右往左往し

ていたが、指示があり、東ハイラル駅に集合した。最終の列車が駅を出たのは夜の十二時頃であった。私達は、その列車を見送った後、三台のトラックでハイラルを出発した。市街に火の手があがり、真赤に空を焼いていた。時々照明弾が落とされ、稲妻のように光っていた。しかし、最後の列車は脱線し不通となった。

子供たちは線路づたいに草原を歩きはじめ、それを目がけてソ連機の機銃掃射が行われた。私達は牙克石駅まで急行し、救援列車を出すよう野鉄司令部に要求したが、そんな列車はないことわられた。粘りに粘って無蓋車を出してもらい、救援に行った。やつのことで、これらの人々を列車に救い上げ再び牙克石駅から無事を祈るような気持ちで列車を見送ったあと、私達はトラックで興安嶺を越えた。敵機は暗夜に爆弾を投下した。それを見ながら疲労のため、トラックの上で立ちながら眠った。札蘭屯に到着したのが十二日未明であった。

札蘭屯で陛下の終戦の詔勅を聞き、皆涙を流し、嗚咽は部屋に満ちた。その直後、街の方から中華民國万

歳の声が聞こえてきた。こうしてはおれないと不安の中で情報を集めに廻った。日本軍は興安嶺で防衛戦をやると聞いていたが、続々列車で南下しており、ソ連の戦車部隊も間近に迫っていると聞き、市民を再び列車で南下させた。私達も再びトラックで札蘭屯の街を出ることにした。

私達のトラックはチチハル市に着いたが、ハイラル市民は未だ着いていない。私達は避難民の宿舍と食糧と衣服を準備しなければならなかった。トラックで糧穀商、組合などを頼み歩き、宿舍は女学校、官吏会館、市民会館などを準備し、食糧も当座の分だけは何とか確保した。

当時のチチハル市は、ソ連兵侵入による物取り、暴行、八路軍侵入による日本人に対する戦犯、右派分子としての人民裁判による処刑、国民党軍によるテロなど市民は恐怖の中にあつた。

ソ連軍による日本の警察官のソ連送りが命ぜられた。これは日本軍の脱走兵が相つき、その穴埋めのようであつた。難民は男手がさらに不足し、段々と生活

が苦境となつてきた。自活のために、労働、物売り、女子は飯店などで働き生活費を稼がなければならなくなつた。

子供達はしだいに栄養失調になり、五歳以下の子供達は、毎日のように死んでいった。病気になるても薬がないので、見るに見かね私は陸軍病院に薬を何とかならないかとお願ひに行つた。陸軍病院の院長は既に日本の軍医ではなく、八路軍の軍医であつた。その院長は突然「先輩ではないのですか」と言つたのでびっくりしたが、大同学院の後輩であつた。車一台分の薬をもらったが、帰る途中警察官（八路軍）につかまり、薬は没収、私は留置場に入れられた。せつかくの院長の好意が無駄になり、残念であつた。

北滿特有の厳しい寒さがやってくるようになり、疲労と栄養失調でこの冬が生きて越せるか危ぶまれるようになった。最も危ぶまれるのは、働き手のない子供をかかえた婦人達であつた。そこで、夫婦もの、単身の男と女、子供をかかえた婦人をつつの班に編成し、生活共同体、運命共同体としてお互い助けあい生きて

いくようにした。これは日本に帰るまで続き、私も両親を亡くした一人の孤児を日本まで連れて帰った。私達の仲間からは、今日いわれる「孤児問題」が生じなかったことは幸いと思う。

在外邦人の敗戦体験記

埼玉県 吉田 淳

昭和十四年五月、東京で満州重工業(株)傘下の東辺道開発(株)の定期採用となり、同六月上旬に渡瀆し、新日本社で、二週間の研修、同社通化事務所鉱業部調査課配属となった。同事務所は通化省地域の地下資源開発調査のための唯一の前線基地的な内容を持っていた。私はその調査課測量係員として教育をうけ、業務に付いた。

通化省柳河県柳河屯を振り出しに、通化県鉄廠子炭礦、五道江炭礦、三岔子（現在は七宝站）そして湾溝屯等の調査測量を経て、開発計画の要図を作成して約

一年半を過ごした。

その後臨江県煙筒溝採炭所へ、通化県七道鉱業所の通化事務所より正式転属となる。電車坑道の精密測量が目的であり、いずれも貫通して成功した喜びを味わい、仕事に自信を持つことが出来た充実した生活であった。

昭和二十年八月十五日、ラジオでの敗戦のご詔勅を聞き、社員一同涙したものであった。午後急遽幹部社員を集めてのこの事態の対応措置について会議の結果が、自営警備隊長、在郷軍人、青年隊長等を通して、その夜のうちに邦人社員及びその杜宅居住の家族に伝達された。

当時は約三百五十人の邦人家族がおり、一画された杜宅街と独身寮等があったが、独身寮を本部として、今後の行動はすべて糸山所長、栗林副所長をして統師として対応すること、その責任は所長が当る旨が伝達された。究極の方針として、中国人の暴民の襲撃対応警備、杜宅在住者は独身寮を避難場所とするが、現在では情勢は不明なので、現在住宅のままとし、その警